



## 長崎県・私立純心中学校・純心女子高校

## 主体的に学ぶ授業とは？

## 生徒と教師が新しい授業を追究

生徒が設定した課題

## 「先生と生徒の対話による新しい授業」

2021年秋、純心女子高校の2年生（当時）の深堀純香さん、白濱桃香さん、橋本由布子さんの3人が、探究学習のテーマとして「主体的な学び」に関心を持ったのは、自由教育に取り組み、ある私立の小・中学校の校長に話を聞いたことがきっかけだった。

「先生と児童・生徒が話し合って学習内容を決めているその学校では、生徒はとても主体的に学習に取り組んでいると聞きました。私たちは、授業で先生の話聞き、先生の板書をノートに写し、先生から与えられた課題をこなすのが学習だと思っていました。それは主体的な学びなのだろうか、主体的な学びとはどのようなものなのだろうかと考えたのです」（深堀さん）

3人の心の中には、探究学習を担当する榎本六秀先生にかけられた、「調べ学習で終わらせず、分かったことを基に、何か行動を起こしてほしい」という言葉があった。自分たちが選んだ「教育」という領域は、高校生が当事者として行動を起こしやすいものだ。3人は、「先生と生徒の対話による新しい授業」を課題として設定し、様々な教育実践の研究と並行して、自分たちの授業を変えるための行動を始めた。

**新しい授業を考える**にあたってヒントにしたのが、榎本先生の化学の授業だ。先生は授業で、「君たちが主体となって、教師を活用してほしい」と、生徒に呼びかけていた。

「化学の授業は、生徒が自学では分からなかつ

## 純心女子高校の探究学習

今回取材した生徒が所属する国立大学進学希望者クラスの探究学習は、教育、福祉、環境などの領域別の班に分かれ、校内外の人への調査や生徒間での話し合いを通して、探究学習として取り組む課題を設定する。調べ学習で終わらない実践型の探究学習を目指しており、「障がい者と健常者の関係をアップデートする」を目標に、特別支援学校の生徒と協働でワークショップを実施した班もあった。

お話を伺った  
生徒の皆さん小島麻由美さん  
(2年生)木須さくらさん  
(2年生)深堀純香さん  
(3年生)橋本由布子さん  
(3年生)白濱桃香さん  
(3年生)

※プロフィールは、2023年3月時点のものです。

たところをグループで話し合い、それでも解決できなかったことを、先生に説明してもらおうという進め方でした。他の科目の授業も化学と同じ進め方ができるとは考えていませんでしたが、生徒の学習上の課題を授業の軸にするという点は参考にしようと思いました」（白濱さん）

3人は、数人の教師に、「先生と生徒の対話による新しい授業」を探究学習で取り組む課題として設定したことを説明し、授業で学習することや取り組むことを、教師と生徒が話し合っ

て決める試みを提案した。3人の話に教師たちは驚きながらも、生徒の学びの意欲を喚起し、自身の授業改善にも役立つのであればと理解を示した。早速3人は、各科目でどんな学びを望むのかを他の生徒からヒアリングし、その結果を整理して教師に伝えた。

**だが、試みは失敗した。**他の生徒からの声は、「話し合いの時間を増やしてほしい」「クイズ形式で要点を確認する時間を設けてほしい」といった、表面的な要望に終始したからだ。

「私たちの要望を踏まえた授業を、実際に先生方にしてもらいましたが、今までの授業との違いは感じられませんでした。生徒からは、『小テストの問題数が多すぎるので半分にしてほしい』という要望もありましたが、先生に相談したところ、『大学入試を見据えて問題数を設定しています』と言われてしまいました。先生方が考えた授業のねらいなどを理解しないまま、

表面的な要望を伝えることは対話ではないし、そうした要望でつくられた授業からは主体的な学びは生まれなと思います」（深堀さん）

**新たな問題も浮かび上がった。**それは、

授業に対する「責任」は誰にあるのかだ。新しい授業の形を提案し、実際に授業を行ってもらい、その成果や反省を次の授業に生かそうと考えた3人は、「複数回にわたって、私たちに授業の内容を組み立てさせてほしい」と、古典の担当教師に願い出た。それに対してその教師は、「あなたたちに対して私は責任があるから、何回も授業を任せることはできない」と答えた。

「その先生が言った『責任』という言葉が引っかかりました。授業で分かったこと、分からなかったことを生徒が教師に伝えて、次の授業のあり方を一緒に考えようとするならば、授業の責任は先生だけではなく、生徒にもあるのではないか……。主体的に学ぶ授業の責任の所在について考え込んでしまいました」（橋本さん）

**22年度になって、**「先生と生徒の対話による新しい授業」という課題に、2人の新2年生が参画した。木須さくらさんと小島麻由美さん

だ。木須さんは、先輩の取り組みを知り、授業の不満を教師だけにぶつけてきた自分を変えたいと考えた。そして、英語の担当教師に、自分がこの課題を選んだことを伝え、「よりよい授業のあり方を先生と話し合いたい」と申し出た。「先生は私の申し出に驚いていましたが、怒

**「もしも、あの時私が……」**

**生徒の探究は今も私の中にある**

松尾まりこ先生（国語科）



「主体的な学びについて考えるために、自分たちで授業をつくりたい」という申し出を、私は「教師としての責任がある」と断りました。「あの時、一緒に授業をつくっていたらどうなったのだろう」と、今も考えます。生徒が考えた授業であっても、そこに教師である私がいれば、「責任」を果たせていたのかもしれませんが、3人の取り組みは、私にとっても忘れられないものになりました。

**自分なりの答えを求める生徒に、教師としても影響を受けた**

百岳真吾先生（地理歴史・公民科）



探究学習では、生徒は答えが1つではない課題に取り組みますが、彼女たちからは、何とかして自分なりの答えを見いだそうとする意気込みを感じました。彼女たちと授業のあり方について話し合い、そして彼女たちがもがきながら考えている姿を見て、私の中で、生徒が主体的に、より深く学ぶ授業を追究したいという気持ちが、今まで以上に高まりました。

りませんでした。それどころか、『授業のことを大切に考えてくれていたんだね。一緒に頑張ろう』とまで言ってくれました」

2人は、他の生徒にも呼びかけ、これまでの英語の授業のよいところ、改善してほしいところ、授業を通じて身につけたい力などを話し合った。だが、ここでも予想外の事態が起きた。

『今のままの授業でよいのに、なぜ、そんなことを話し合うの？』などと、私たちの取り組みに反対する意見が出てきたのです。自分がよいと思ったからといって、それが必ずしもほかの人にも受け入れられるとは限らないという現実の厳しさを痛感しました」（小島さん）

予想外の事態に、2人はショックを受けた。

「今の授業を変えたくないと言う人のことは気にせず、自分が信じることをやっていこうと思いましたが、次第にクラスの人たちとの溝が大きくなり、学校に行くのも嫌になってきてしまいました。でも、この課題に取り組んできた3人の先輩たちにも相談しながら考えるうちに、私たちの取り組みに反対する人にも、その人なりの理由があるのだと考えるようになったのです。他者の考えを自分と同じ考えに変えるのではなく、考えの違う個が協働して幸せになれるような場をつくる必要があるのだと、私の考えが変わりました」（木須さん）

**教師や他の生徒との対話を通して、授業に対する見方は確かに深まってきたと感じる**

5人だが、新しい授業がどのようなものなのかはまだ見えてない。

「先生方と話をする中で、先生は、『生徒にこうなってほしい』という姿から逆算して授業をしているけれど、私たちの現状と離れすぎてしまふことがあると感じました。自分の現状と距離のある授業だと、先生の話を聞いて、板書を写すだけになってしまいます。でも、授業で自分が学ぶべきことをよく理解していたら、授業の受け方は変わらなと思うのです。生徒が自分の学習上の課題を理解し、先生と共有していくことで、誰にとってもちょうどよい距離感の授業になるのではないかと。だとしたら、そうした授業はどうすれば実現できるのか……。それを今考えています」（白濱さん）

一方、授業の責任や考えの違う個との協働など、当初想定していなかった問題は現在も解決されていない。

「確かに、新しい授業の形を考える過程で、次々と問題が浮かび上がってきましたが、それは調べ学習で終わらせず、分かったことを基に行動を起こしたからこそ生じたものですし、新たな問題にも向き合っているのは、自分たちが成長できているからだと思えます。友人に探究学習のことを話したら、『先生と一緒に授業を変えるなんて考えたこともなかった』と言われました。私も、自分たちがそんなことを考えられたことに驚いています」（橋本さん）

## 高校生は、周囲との衝突も成長の機会にできる

田中一彦先生（英語科）



木須さんと小島さんとは、授業についてというよりも、教育のあり方についてたくさん話をしました。

の生徒と衝突した経験を通じて、考えの異なる他者を受容できるようになったと語る2人の言葉を聞いて、高校生の成長はすごいなと感じました。私は自分の授業が講義型だとは思っていませんでしたが、生徒はそう思っていたことが分かりました。2人と話したことで、私も、もっと進化する必要があるのだと気がつきました。

### ●学校概要

設立 1935（昭和10）年  
形態 全日制/普通科/女子校  
生徒数 1学年（高校）約150人  
2022年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、筑波大、千葉大、埼玉大、横浜国立大、高知大、佐賀大、長崎大、宮崎大、北九州市立大、長崎県立大などに18人が合格。私立大は、津田塾大、東洋大、南山大、ノートルダム清心女子大、西南学院大、長崎純心大などに延べ96人が合格。

担当教師と考える「探究学習における主体性」



長崎県・私立純心中学校・純心女子高校  
3学年担任

**樋本六秀** つちもと・むつひで

教師歴 26年。同校に赴任して 27年目。理科。



VIEW next編集部 統括責任者

**柏木 崇** かしわぎ・たかし

自分事のテーマだから  
粘り強く取り組めた

**柏木** 自分は主体的に授業に臨んでいるのだろうかと考え、教師と一緒に授業をつくっていかうと考え、実際に提案・実行した生徒の行動力にはとても驚かされました。私自身の高校時代を思い出すと、正直、先生に言われたことをこなすだけで、主体的に学ぶことができていなかった授業もありましたが、そのような授業を自分の力で変えていかうなどと考えたことは、一度もありませんでした。

**樋本** 5人の取り組みを知った人たちは、柏木さんのように驚きます。でも、生徒たちはいたって普通の高校生で、決して我を通すタイプではありません。

**柏木** それなのに、先生に自分たちの考えを説明し、時にクラスメートと衝突しながら探究学習を進めていったのです。生徒が理想の授業を考える上でヒントになったのが、樋本先生の化学の授業だったのですが、探究学習に取り組む生徒からは、相談事も多かったのではないのでしょうか。

**樋本** 何度か相談に来たので、丁寧に話を聞き、「それはなぜ?」「あなたの気持ちは?」などと尋ねました。ただ、具体的なアドバイスは一切しませんでした。それでも、生徒たちの主体性が高く維持されていたのは、主体的に学ぶ授業の実現が、生徒たちにとって避けては通れない自分自身の課題だったからだだと思います。柏木さんは、「主体的に学べていなかった授業もあったけれど、授業を自分の手で変えようと思わなかった」と言いました。私も、高校時代は同じでした。その理由は、私たちは主体的に学んではいなかったけれども、

家庭学習などで補えば、学習内容を理解できたから、つまり、自分の困り事ではなかったからだと思うのです。高校生が授業をつくるという発想も、当時の自分にはありませんでした。今回の生徒にとっては、粘り強く取り組む価値があるテーマだったのでしょうか。

日々の教師の問いかけを通して、  
生徒は自分と向き合う

**樋本** 生徒が主体的に探究学習に取り組んだ理由は、もう1つあると思っています。それは、高校入学時から自分と向き合う時間がたくさんあったからかもしれません。3人の3年生には、私は担任として3年間かかわってきましたが、日々いろいろな問いを投げかけてきました。1年次の4月、どんな高校生活を送りたいか、生徒たちに聞いたところ、何人かの生徒が、「自分らしい高校生活」と答えました。私が「自分らしいって、どういうこと?」と尋ねると、生徒たちは思い思いの答えを口にしました。しかし、さらに問いを重ねると、生徒たちは「自分らしさ」が何なのか分からなくなりました。その時、生徒にとって「自分らしさ」は、3年間を通じた探究課題になったのだと思います。以降、私は学校生活の様々な場面で、「あなたはどうか考えているの?」「どうしたいの?」と尋ねました。柏木さんが取材に来た際も、生徒に「今日、ベネッセの柏木さんが来るけど、どうする?」と聞きました。

**柏木** はい。樋本先生を訪ねると、いつも多くの生徒さんに囲まれ、様々なテーマで私が逆取材されます。

**樋本** 私が「どう思う?」「どうしたい?」と尋ねる度に、生徒は自分に向き合っていたのだと思います。「先生と生徒の対話による新しい授業」を課題として設定した生徒たちも、自分と向き合った末にこの課題にたどり着き、自分が取り組む価値を理解していたからこそ、粘り強く取り組めたのだと思います。探究学習を通して授業を変えたいという気持ち以上に、自分を変えたいという思いがあったのではないのでしょうか。

**柏木** 樋本先生から日々投げかけられる問いを通じて、生徒は自分と向き合ってきたからこそ、探究学習にも主体的に取り組めたのでしょうね。豊かな探究学習を実現する土壌は、豊かな学校の日常の中で育まれるものなのだと、改めて実感しました。

純心女子高校の樋本六秀先生と遠野高校の佐藤紘大先生が、生徒主体の探究学習をテーマに語り合いました。その模様を取材したウェブオリジナル記事を、ぜひご覧ください(右記の2次元コードを読み込み、またはクリックしてアクセス)。VIEWnext ONLINE ▶

